

Lesson 2

活用 / 所有格 / 冠詞

2-1 活用

- ・動詞には「**原形、現在形、過去形、過去分詞形、ing形**」という5つの形があります。^{注1}
- ・この5つの形をひとまとめにして「**活用**」と呼びます。^{注2}

注1 **動詞は必ずこの5つの形のどれかで使われます。**ing形を「現在分詞形」とする文法書もありますが、この本ではing形にしてください。ing形は「アイエヌジー形」と言っても「イング形」と言っても、どちらでもよいです。なお**「未来形」という活用がないことに注意してください**(未来形はp.121参照)。**本書ではLesson 5までは現在形と過去形の動詞しか出てきません。**

注2 **現在形は原形と同じか、または原形にsが付いたつづりになります。**このsは「3人称・単数・現在のs(略して、3単現のs)」といい、4-5で勉強します。ただし原形がbe(ビ)である動詞(この動詞はbe動詞と呼ばれます)は例外で、原形はbeですが、現在形は、beかbesではなく、am(アム)かis(イズ)かare(アー)です。be動詞は3-2で勉強します。**過去形と過去分詞形は原形にedが付いたつづりになることが多いです。こういう活用を規則活用といいます。そうならない活用は不規則活用といいます。ing形は原形にingが付いたつづりになります。**たとえば、answer(アンサ)(答える)は規則活用の動詞なので「answer—answer または answers—answered (アンサド)—answered—answering (アンサリング)」という活用です。eat(イト)(食べる)は「eat—eat または eats—ate(エイト)—eaten(イートン)—eating (イーティング)」という活用なので、不規則活用の動詞です。**「この動詞は何形?」と聞かれたら、必ずこの5つの形のどれかを教えてください。「この動詞の活用を言いなさい」と言われたら、5つ全部を言うのではなく、「原形、過去形、過去分詞形」の3つを教えてください。「この動詞の活用を全部言いなさい」と言われたら、5つ全部を教えてください。**たとえば「ateは何形?」と聞かれ

たら「過去形」と答えます。「ateの活用を言いなさい」と言われたら「eat—ate—eaten」と答えます。「ateの活用を全部言いなさい」と言われたら「eat—eatまたはeats—ate—eaten—eating」と答えます。

質問 2 次の質問に答えなさい（スラスラ言えるようになるまで練習してください）

1. 活用は全部でいくつか？
2. 活用の最初の形は何形か？
3. 活用を最初から順番に言いなさい。
4. 活用の3番目の形は何形か？
5. 活用の2番目の形は何形か？
6. 活用に未来形はあるか？
7. 活用に現在分詞形はあるか？
8. 活用に過去分詞形はあるか？
9. 過去分詞形は活用の何番目か？
10. 活用の最後の形は何形か？
11. 活用を言いなさいと言われたら何形を答えるか？
12. 規則活用とはどういう活用か？

質問 2 の答え 1. 5つ 2. 原形 3. 原形・現在形・過去形・過去分詞形・ing形 4. 過去形
5. 現在形 6. ない 7. ない 8. ある 9. 4番目 10. ing形 11. 原形と過去形と過去分詞形 12. 過去形と過去分詞形が、原形にedが付いたつづりになる活用

2-2 代名詞

- ・名詞の代わりに使われる語を代名詞と言います。
- ・代名詞は名詞の中の特定の一部です。^{注1}

I	[アイ] (私) ^{注2}
we	[ウィ] (私たち)
you	[ユ-] (あなた、あなたたち)
he	[ヒー] (彼)
she	[シー] (彼女)

it	〔イト〕(それ)
they	〔ゼイ〕(彼ら、彼女たち、それら)

注1 本書では、原則として、代名詞も名詞として扱います。

注2 I〔私〕は常に大文字です。

- ・普通の名詞は語尾に「s」または「's」または「s'」が付く形しかヴァリエーションがありません。^{注3}
- ・ところが、代名詞はいろいろ形が変わるという特殊性をもっています。^{注4}

私	I me my mine	〔アイ ミー マイ マイン〕
私たち	we us our ours	〔ウィ アス アー アウズ〕
あなた、あなたたち	you your yours	〔ユー ユア ユアズ〕
彼	he him his	〔ヒー ヒム ヒズ〕
彼女	she her hers	〔シー ハー ハーズ〕
それ	it its	〔イット イッツ〕
彼ら、彼女たち、それら	they them their theirs	〔ゼイ ゼム ゼア ゼアズ〕

注3 「'」は「アポストロフィ」という記号です。「's」は「アポストロフィ エス」と読みます。たとえば、dog は dogs または dog's または dogs' しかヴァリエーションがありません。これらのヴァリエーションは Lesson 4 で勉強します。

注4 これらは、だんだんに覚えていけばよいです。とりあえず赤太字の形だけはここで覚えましょう。

2-3 所有格

- ・「誰その」という意味を表す形容詞を特別扱いして「所有格」と呼びます。^注

注 my〔マイ〕(私の)とか your〔ユア〕(あなたの、あなたたちの)とか Tom's〔タムズ〕(トムの)のような語です。my car〔マイ カー〕(私の車)と言ったとき、my は car という名詞を説明している形容詞です。これらの語は他の語の助けを借りずに直接的にどんな名詞であるかを説明しているので「働き」は名詞修飾です。学校では、これらの語を「代名詞の所有格」とか「名詞の所有格」と呼びます。この呼び方だと、my や your の品詞は「代名詞」、Tom's の品詞は「名詞」ということになります。本書では、必要があるときは「代名詞の所有格」「名詞の所有格」という呼び方をしますが、普通は「品詞は形容詞、働きは名詞修飾、呼び名は所有格」ということにします。実際、これらの語は「所有形容詞(これは「所有の意味を表す形容詞」という意味で、正式な文法用

語です)」とも言うので、本書のように扱うことは何の問題もありません。

(私の) (車)
my car [マイ カー]
 a → n

my は「品詞は形容詞、働きは名詞修飾、呼び名は所有格」です。

(あなたの) (本)
your book [ユア ブック]
 a → n

your は「品詞は形容詞、働きは名詞修飾、呼び名は所有格」です。

(トムの) (妹)
Tom's sister [タムズ シスタ]
 a → n

Tom's は「品詞は形容詞、働きは名詞修飾、呼び名は所有格」です (p. 28 参照)。

2-4 不定冠詞と定冠詞

このセクションはざっと流し読みして、**a と an と the が「名詞を修飾する特殊な形容詞である」ことと「品詞と働きを記入しない」ことを了解したら 2-5 に進んでください。**冠詞の細かな意味や使い分けは「はじめに」で力説した「最も大事なもの (=品詞と働きと活用の相互関係)」ではありません。ですから、後でゆっくり勉強すればよいのです。

・ a と an と the という 3 つの形容詞を特別扱いして「冠詞」と呼びます。

2-4-1 a と an

- ・ これは名詞の前に置く形容詞で、他の語の助けを借りずに直接的にどんな名詞であるかを説明しているので「働き」は名詞修飾です。
- ・ **この形容詞は特別に「不定冠詞」と呼ばれます。**^{注1}
- ・ 次に続く語が子音で始まるときは a〔ア〕を、母音で始まるときは an〔アン〕を使います。^{注2}
- ・ 不定冠詞を名詞に付けるといろいろな意味を表しますが、基本は次の 2 つの意味です。

(不特定の) ある名詞^{注3}

(個別的、具体的な) 一つの名詞^{注4}

注1 **不定冠詞の下には品詞も働きも記入しない**ことにします。

注2 母音はアイウエオという音のことで、子音はそれ以外の音のことで。ですから a desk [アデスク] (ある机、一つの机)、an apple [アナプル] (あるリンゴ、一個のリンゴ) となります。

注3 **「不特定」というのは「聞き手には、どれであるかわからない」ということです。**話し手はどれであるかわかっていてもよいのです。たとえば「僕は昨日日本を読んだ」と言った場合、話し手は、自分が読んだ本ですから、タイトルから内容まで知っています。ですから、この「本」は話し手にとっては特定 (= どれであるかわかる) です。しかし、聞き手には不特定 (= どれであるかわからない) です。そこで、この場合の「本」は「(不特定の) ある本」で a book [アブック] です。

注4 「個別的、具体的な」というのは「同種の他のものと区別できて、1つ2つと数えられる」ということです。たとえば desk (机) を考えてみましょう。机は大きさ、形、色などの違いがあって、他の机と区別できます。そして机は1つ2つと数えられます。そこで「一つの机」は a desk です。

2-4-2 the

- ・これは名詞の前に置く形容詞で、他の語の助けを借りずに直接的にどんな名詞であるかを説明しているので「働き」は名詞修飾です。
- ・**この形容詞は特別に「定冠詞」と呼ばれます。**^{注5}
- ・次に続く語が子音で始まるときは [ザ] と発音し、母音で始まるときは [ズイ] と発音します。^{注6}
- ・定冠詞を名詞に付けるといろいろな意味を表しますが、基本は次の2つの意味です。

(今話題にした) その名詞^{注7}

(あなたもご存知の) この、あの、例の名詞^{注8}

- ・the はこの2つの意味を表す以外にもいろいろな使い方をしますが、とりあえず、ここでは、次の使い方を知っておきましょう。

(常識的に) 一つしかない名詞には the を付ける。^{注9}

「the 名詞」が「名詞というもの」という意味を表すことがある。^{注10}

注5 定冠詞の下には品詞も働きも記入しないことにします。

注6 ですから the desk [ザ デスク]、the apple [ズィ アプル] となります。

注7 たとえば「昔々ある村に一人の少年が暮らしていました。その村はとても小さな村で、その少年の他には村人は10人しかいませんでした」という文章を考えてみましょう。「ある村」と「一人の少年」は聞き手には不特定です。そこで a village [ア ヴィリヂ]、a boy [ア ボイ] と言います。それに対して「その村」と「その少年」は、聞き手には「今話題にされた村と少年だ」とわかります。そこで the village [ザ ヴィリヂ]、the boy [ザ ボイ] と言います。

注8 スポーツの世界カップにはサッカー、バレーボール、ラグビーなどいろいろあります。しかし、サッカーファンの間では「ワールドカップ」と言えば、サッカーの世界カップに決まっています。そこで the World Cup [ザ ワールド カップ] と言います。これは「あなたもご存じの、あの、例の世界カップ」という意味です。

注9 たとえば「世界で一番高い山」と言ったら、常識的に「世界」も「この山」も一つしかありません。そこで the highest mountain in the world [ザ ハイエスト マウンティン イン ザ ワールド] と言います。

注10 たとえば「犬は役に立つ動物である」という文を考えてみましょう。これは「犬というものは役に立つ動物である」という意味で、この「犬」はシェパードとかコリーとか特定の犬種を指しているのではなく、犬と呼ばれる動物の最大公約数的なもの(=犬と呼ばれる動物の典型)を指しています。こういう「犬」は the dog [ザ ドグ] と言います。この場合の the を「総称の the」と言います。

2-4-3 不定冠詞

- ・不定冠詞 (a, an) は「この名詞は1個2個と数えられる名詞で、これは単数である」と話し手が認識したときに、そのこと(=この名詞は1個2個と数えられる名詞で、これは単数である、ということ)を聞き手に伝えるために、話し手が使う形容詞です。
- ・話し手が「この名詞は1個2個と数えられる名詞である」と認識する理由はいろいろあります。(この項は『わかりやすい英語冠詞講義』石田秀雄著を参考にしました)

(理由1) 空間的に他の同種のものとは区別できる境界をもっているから。注11

(理由2) 時間的に他の同種のものとは区別できる境界をもっているから。注12

(理由3) 形態的に他の同種のものとは区別できる特徴をもっているから。注13

(理由4) 内容的に他の同種のものとは区別できる特徴をもっているから。注14

(理由5) 物質や素材ではなく、物体だから。注15

(理由6) 物質や素材だが、容器に入っていたり、固められたりしているから。注16

(理由7) 現象ではなく出来事だから。注17

注11 ただ「空間」と言っただけでは、他の空間と区別できる境界がないので1つ2つと数えられません。ですから、ただ「空間」は冠詞を付けずに space (スペース) と言います。それに対し「駐車場の一区画」は、境界線で仕切られていて、1つ2つと数えられます。そこで a parking space (ア パーキング スペース) と言います。

注12 ただ「沈黙」と言っただけでは、他の沈黙と区別できる時間的な境界がないので1つ2つと数えられません。ですから、ただ「沈黙」は冠詞を付けずに silence (サイレンス) と言います。それに対し「彼の発言の後に長い沈黙があった」の「沈黙」は時間的に始まりと終わりがあって、他の沈黙と区別でき、1回2回と数えられます。そこで a long silence (ア ロング サイレンス) と言います。

注13 「美」は景色にも芸術にも人間にもある性質であって、景色の美と芸術の美は、お互いに区別できる形態的な特徴をもっていません。ですから「美」は冠詞を付けずに beauty (ビューティ) と言います。それに対して「美人」「美点」「美しいもの」は形態的に他の美人、美点、美しいものと区別できる特徴をもっています。ですから「一人の美人」「一つの美点」「一つの美しいもの」は a beauty (ア ビューティ) と言います。

注14 ただ「赤ワイン」と言ったときは液体の物質である赤ワインで、内容的に他の赤ワインと区別できる特徴をもっていません。ですから冠詞を付けずに red wine (レッドワイン) と言います。それに対して、ボルドー産の赤ワインのように「(ある特定の産地の) 赤ワイン」は味や香りの点で他の産地の赤ワインと区別できる特徴をもっています。そこで a red wine (ア レッドワイン) と言います。

注15 「石造りの教会」と言うときの「石」は石という物質・素材を指しています。ですから、この場合の「石」は冠詞を付けずに、ただ stone (ストーン) と言います。それに対して「彼は石を投げた」と言うときの「石」は輪郭のある塊としての物体で、1個2個と数えられます。そこで a stone (ア ストーン) と言います。

注16 「コーヒーを飲む」と言うときの「コーヒー」は液体の物質ですから、冠詞を付けずに、ただ coffee (コフィ) と言います。それに対して「一杯のコーヒー」は容器に入っていて、一杯二杯と数えられますから、a coffee (ア コフィ) と言います。「一杯のコーヒー」は、物質のコーヒー (= 無冠詞の coffee) を使って a cup of coffee (ア カップ コフィ) と言うこともできます (of は p. 46 参照)。

注17 「火」は酸素が燃焼している現象ですから、冠詞を付けずに、ただ fire (ファイア) と言います。それに対して「火事」は一件二件と数えられる出来事ですから a fire (ア ファイア) と言います。

2-4-4 不定冠詞の特殊性

- ・不定冠詞は普通の形容詞とは違う性質をもっています。
- ・普通の形容詞は名詞を説明したり限定したりするだけで、名詞の意味を根本的に変えてしまうことはありません。

- ・ところが、**不定冠詞は名詞の意味を根本的に変えてしまうことがあります。**注18

注18 冠詞を付けずに、ただ chicken(チケン)と言ったときは、物質や素材なので「鶏肉」という意味ですが、a chicken(ア チケン)と言うと、1つ2つと数えられる物体なので「一羽の鶏」という意味になります。ただ room(ルーム)と言ったときは「空間、余地」ですが、a room(ア ルーム)と言うと「部屋」という意味になります。複数形のsも不定冠詞と同じ特殊性をもっています。これについては4-2で勉強します。

2-4-5 定冠詞

- ・定冠詞は3つの場合に使います。

- (1) 「この名詞の指示対象がどの名詞であるか^{注19}聞き手に当然わかるはずだ」と話し手が認識したとき「the 名詞」と言います。注20

注19 「この名詞の指示対象がどの名詞であるか」というのは「この名詞が指し示しているのは特定の名詞なのだが、実際にどの名詞を指しているのか」ということです。

注20 「この名詞の指示対象がどの名詞であるか聞き手にわかる」とき「the 名詞」と言うのではありません。これは「聞き手がわかる状況が客観的に生じているとき」あるいは「聞き手が実際にわかるとき」という意味ですが、そうではないのです。正しくは、「**聞き手に当然わかるはずだ**」と話し手が認識したとき「**the 名詞**」と言うのです。これは「聞き手に当然わかるはずだ」と話し手が認識しただけですから、話し手が勝手にそう認識しただけで、客観的には聞き手がわかる状況ではないかもしれませんし、聞き手は実際にはわからないかもしれません。それでもかまわないのです。theを使うのは話し手ですから、話し手が「聞き手に当然わかるはずだ」と認識すれば、話し手はtheを使ってよいし、実際にtheを使うのです。ですから、話し手が「the 名詞」と言ったとき、それを聞いた聞き手が「何だ『the 名詞』って？『the 名詞』なんて言われても、何を指しているのかわからないぞ!」ということが起こりえるのです。

- ・話し手が「この名詞の指示対象がどの名詞であるか聞き手には当然わかるはずだ」と認識するのはいろいろなケースがあります。

(ケース1) 以前に話題にしたので「その名詞」と言えばわかる場合。

(ケース2) お互いに共通の理解があるので「例の名詞」あるいはただ「名詞」と言えばわかる場合。注21

(ケース3) 説明を付けたので、「以前に話題にした名詞」であること、あるいは「お互いに共通の理解がある名詞」であることがわかる場合。注22

注 21 「この手紙を郵便局に持っていきなさい」と言う場合、「郵便局」と言えば、聞き手は「あの、いつもの、駅前の郵便局だな」とわかる状況があるときは the post office (ザ ポスト オフィス) と言います。そうではなくて「どこの郵便局でもいい、ともかく、どこかの郵便局」という場合には a post office (ア ポスト オフィス) と言います。

注 22 「本」と言っただけでは、聞き手はどの本かわかりません。しかし「昨日私が買った本」と言えば、聞き手は「ああ、さっき話し手が話題にしていた本のことか」とわかるときは the book I bought yesterday (ザ ブック アイ ボート イェスタデイ) と言います。それに対して「昨日私が買った本」と言われても、聞き手は初耳で、どの本かわからないときは a book I bought yesterday (ア ブック アイ ボート イェスタデイ) と言います。したがって「これが、私が昨日買った本です」の「昨日買った本」は the book I bought yesterday ですが、「これは、私が昨日買った本です」の「昨日買った本」は a book I bought yesterday です。なお、bought は「買う」という意味の動詞の過去形で、活用は [buy (バイ)—bought (ボート)—bought] です。I bought yesterday は「関係代名詞が省略された形容詞節」で、これは 13-9 で勉強します。

(2) 「この名詞の指示対象について聞き手は知らないかもしれないが、これが 1 つしかないことは聞き手には当然わかるはずだ」と話し手が認識したとき「the 名詞」と言います。^{注 23}

注 23 話し手がこのように認識するのは「常識的に 1 つしかない」ことが根拠になっていることが多いです。たとえば the president of a company (ザ プレジデント オヴ ア カンパニ) (会社の社長) のような場合です。

(3) 個体による小さな違いを切り捨て、同類のものすべてに共通する要素だけを残して「～というもの」と言うとき「the 名詞」と言います。^{注 24}

注 24 The dog is a useful animal. (ザ ドグ イズ ア ユースフル アニマル) (犬は役に立つ動物である) のような場合です。この the を「総称の the」といいます。is は p. 22 参照。

2-4-6 定冠詞の特殊性

- ・定冠詞には不定冠詞の持つ特殊性 (= 名詞の意味を根本的に変えてしまうことがあるという性質) はありません。

2-5 名詞＋名詞

- ・**名詞＋名詞** で 1 つの名詞になることがあります。^注

注 この場合は名詞＋名詞に下線を引いて n と書きます。

(男の子) (友だち)

boy friend [ボーイ フレンド] (ボーイフレンド)
n

(学校) (生活)

school life [スクール ライフ] (学校生活)
n**問題 2**

- (1) 各語の下に品詞を書きなさい。
- (2) 名詞 + 名詞で 1 つの名詞になっているときは下線を引いて n と書きなさい。
- (3) 修飾する働きをしているときは、それを矢印で示しなさい。
- (4) 使われている動詞の活用 (原形—過去形—過去分詞形) を辞書で調べて書きなさい。
- (5) フレーズ全体を日本語に訳しなさい。

[スーン ビギャン ナ ディファレント ジャブ]
 (すぐに) (始めた) (違う) (仕事)を

1. soon began a different job

活用は () — () — () で、
 began は () 形である。

和訳は _____ である。

[スタート アナクセサリ シャップ]
 (始める) (装身具) (店)を

2. start an accessory shop

活用は () — () — () で、
 この start は () 形である。

和訳は _____ である。